

パラグアイにおけるレイスモについて

青砥 清一

1. 序

パラグアイにおけるレイスモ（間接目的格三人称代名詞 *le* による直接目的格の代用法）は、中南米ではあまり見られない局地的バリエーションとして知られ、その歴史的な成り立ちやグアラニー語との言語接触による影響に関心が集まり議論されてきた。一方、そのような特殊な社会言語学的事情を抱えるため、アメリカスペイン語の統語論研究からは例外的ケースとして排他的に扱われてきた経緯があり、詳細な運用実態に関する研究は未だ十分に行われていないのが現状である。筆者は現地調査（2004 年 8 月、2009 年 8 月）において収集した言語資料を分析するなかで、パラグアイにおけるレイスモの使用には何らかの統語論的・意味論的な動機が働いているのではないかという問題意識を抱いた。本研究は、同国のレイスモがどのような統語的環境において発生し、どのように動機付けられているのか探求するものである。

2. レイスモとは

本研究のテーマであるレイスモ（*leísmo*、レ代用法）とは、典型的には男の人を直接目的語として指すときに対格 *lo* の代わりに与格 *le* を用いる現象である。つぎの例では、既出の直接目的語 *Juan*（男性名）を照応する人称代名詞として、元来の *lo* に代わって *le* が用いられている。

- (1) *Buscamos a Juan, pero no le encontramos.*

レイスモの発生要因にはつぎの2つの類推が働いていると考えられている (Lapesa 1997: 405)。一つは、スペイン語では人の目的語には前置詞 *a* によって標示し、事物と区別する: *llevo {a usted / una maleta}*。その意図と類似して、*le* が人、*lo* が事物であると類推された。

もう一つの要因は、直接目的格男性形 *lo* が中性形¹ と同形であることによる。次表に示すとおり、代名詞の文法的性の体系 (男性形 *-e*、女性形 *-a*、中性形 *-o*) において構造の圧力がかかり、男性形 *lo* の語尾が *-e* に変化したものとみられる。その結果、男性形と中性形の同音異義が回避される。

	男性形	女性形	中性形
指示代名詞 (近称)	<i>este</i>	<i>esta</i>	<i>esto</i>
直接目的格人称代名詞	<i>lo (> le)</i>	<i>la</i>	<i>lo</i>

レイスモの歴史は中世スペインに端を発する。16世紀、北西部の作家 (Cervantes, Lope, Quevedo 等) の間で愛用されていたことから、レイスモは文化的で雅な語法として肯定的に受けとめられ、18世紀には域内において一般化し、それが現代に引き継がれた (Lapesa 1997: 405)。一方、スペイン南部ではレイスモは起らず、アンダルシア地方出身者の多い中南米に伝播しなかった (三好 2006: 110)。現代では、メキシコ、カリブ、中米、エクアドル² などにも分布が確認されているものの、スペインやパラグアイほど強い勢力は見られない (Varilex 2002)。スペイン語圏全体から見れば、レイスモは特定地域の一変種に過ぎないが、その分布域に言語中心地スペイン・カスティーリャ地方が含まれ、なおかつ同地方の教養層において使用されてきたことから、スペイン王立アカデミーは、男の人の直接目的語を指示する典型的な用法に限り容認している (Real Academia Española 2009)。

¹ 前出の命題内容を照応するほか、抽象的な事柄、漠然とした状況などを指す: *no lo entiendo* (私はそのことがわからない); *lo pasamos bien* (私たちは楽しく過ごした)。

² アンデス地方の先住民語 = ケチュア語・アイマラ語の影響によるものと考えられるが、教養スペイン語では消失傾向にある (Fernández-Ordóñez 1999: 1343)。

3. パラグアイにおけるレイスモの成り立ち

パラグアイにおけるレイスモの起源は植民地時代に遡る。17～18世紀、副王領パラグアイ県に移住して来たスペイン系住民の多くがレイスモ発祥の地、スペイン北西部の出身者であった（Granda 1988: 213, Alvar 2001: 307）。当時の年代記を辿ると、ラプラタ地方出身の歴史家グスマンはレイスモを用いて記述している。

- (2) ... y teniendo comunicación con los naturales, *le* recibieron con buen acogimiento, ... [Guzman 1612: 2]

それから約2世紀後に執筆されたアサラ³の年代記にもレイスモが見られる。

- (3) Apenas nace un niño entre los campestres, *le* toma su padre ó hermano, y *le* lleva delante á caballo por el campo... [Azara 1847: 307]

スペイン統治時代に持ち込まれたレイスモが、アルゼンチンやボリビアなど、周辺の非レイスモ地域から標準語法の影響を受けることなく、なぜパラグアイに残存したのか。その理由として考えられるのが地理的および政治的な背景である（Granda 1988: 229）。地理的には同国が南米の辺境地にあり、近代まで河川以外の交通手段が未開発であったこと、政治的にはスペインからの独立後に鎖国政策が採られたことや周辺諸国と敵対する時代⁴が続いたことが挙げられる。このようにパラグアイと周辺諸国との交流が制限されていたことに加え、現代までレイスモが維持されてきた要因として考慮すべき

³ 国王の命令を受け、1781年にスペインからラプラタ副王領に赴任した。彼の執筆した年代記はアスンシオン政府に提出され、当時の教養層の間で広く読まれた。

⁴ 三国戦争（Guerra de la Triple Alianza, 1866-70）、チャコ戦争（Guerra del Chaco, 1932-35）。

言語環境は、先住民語＝グアラニー語との接触である（詳細は第5章にて論じる）。

上記のとおり、パラグアイのレイスモは中世スペインに由来するが、現在の使用状況にはスペインとの共通点と相違点がある。まず共通点を一つ挙げると、慣用的に共起しやすい動詞が一致する（*acompañar, ayudar, conocer, creer, encontrar, esperar, invitar, llamar, llevar, matar, saludar, ver* 等）。

- (4) *Le acompañaba su esposa de nombre Patria, de 21 años.* [Última Hora: 09-9-6]
- (5) *No le creyó para nada, ...* [Pedrozo 2006: 116]
- (6) *él le iba a esperar con la puerta abierta.* [Crónica: 09-8-27]

第二に、情意動詞の主語が無生物である場合(7)、目的格人称代名詞には与格がくる傾向がある。一方、生物主語の場合(8)は対格が好まれる。

- (7) *Aunque estaban armados, a los soldados les espantaba la probabilidad de topetarse con Mancuello.* [Villagra Marsal 1964: 30]
- (8) *Un joven motocicleta realizó una denuncia pública contra un inspector de tránsito de la ciudad de Caaguazú, quien lo amenazó con un cuchillo.* [Última Hora: 09-9-6]

第三の類似点は、使役構文の不定詞が他動詞である場合、意味上の主語である人称代名詞は与格をとることが多い。例文(9)では、他動詞 *abrir* とともに与格 *le* が起こっている。

- (9) *Ahora, la cuestión es hacerle abrir la boca a la flor mala.* [Pedrozo 2006: 33]

しかし、自動詞の場合は対格が優勢である。例文(10)では、自動詞 *rabiar* の意味上の主語として対格 *la* が生起する。

- (10) Y se la sacaba del canasto nada más que para hacer*la* rabiar. [Acosta Alcaraz 1994: 28]

一方、相違点としては、スペインのレイスモが文体差にあまり左右されることなく用いられるのに対し、パラグアイのレイスモは基本的には口語体に属する。つぎの文語体(11)と口語体(12)のデータを比較すると、目的格人称代名詞はいずれも人間の男性単数を指すが、前者には *lo* が、後者には *le* が用いられている。

- (11) Juan fue solo víctima, y que *lo* mantuvieron en cautiverio, atado y encerrado en una pieza. [Última Hora: 09-8-28]
(12) Ella convivía con él esos 2 años y prácticamente *le* mantenía. [Crónica: 09-8-27]

さらにスペインのレイスモと異なる点として、パラグアイにおけるスペイン語の日常会話では女の人を指示する機能が定着しつつある。一般紙の文語文(13)では直接目的語 *Carmen* を照応するのに対格 *la* が用いられているが、大衆紙の口語文(14)では与格 *le* による代用が見られる。

- (13) A Carmen *la* conocí buscando en internet avisos sobre cursos especializados. [Última Hora: 09-8-28]
(14) Está shockeada, súper asustada. Ayer *le* llevamos de nuevo al hospital porque se desmayó. [Popular (web): 09-8-31]

このような女の人を指示する *le* の使用については、筆者の実施した文法性テスト⁵（青砥 2007: 69）においても確認された。つぎの文に含まれる丸括弧の数値は、それぞれ左側の人称代名詞を「日常的に言う」と回答した人数である。

- (15) Juan {*le* (5) : *la* (8)} saludó muy amistosamente. [= a la profesora]
(16) Tenemos el gusto de invitar{-*le* (5) : -*la* (6)} a esta fiesta. [= a doña Inés]
(17) A Luisa no {*le* (5) : *la* (8)} vi ayer.

本テストは、弱勢人称代名詞の現れる 3 つの統語パターン — 活用動詞の前(15)、不定詞の接辞(16)、主題化した目的語の共起(17) — に基づき実施したが、これらの統語的環境に関わらず全体的な反応は概ね一致した。わずかに対格 *la* が優勢ではあるものの、与格 *le* にも半数近くの反応が見られる。この割合はスペイン語圏において最も高いレベルである⁶。

パラグアイのレイスモが文語において勢力を失った要因として、つぎの 2 点を挙げる。一つは、近代以降パラグアイに流通する出版物が相当数、非レイスモ地域のアルゼンチンにおいて発行されてきたことである。ラプラタ地方の文化中心地、ブエノス・アイレス市において出版された書物がパラグアイの書店やキオスクに流布しているのである。もう一つは学校教育の影響である。現地の小学校においてインタビューを行ったところ、スペイン語クラスでは、レイスモは元来誤った語法であり、教養語としては使用を避けるべきといった指導が為されているという（青砥 2007: 77）。

⁵ スペイン語を第一言語とする中流以上の階層に属する人からインフォーマント 12 人を選定し、筆者自身が質問した。

⁶ 高垣（2009: 153）においても、パラグアイは他の中南米諸国（メキシコ、コロンビア、アルゼンチン、チリ）と比べて圧倒的に高い割合を示す。

4. 言語資料の分析

本章では、パラグアイで出版され流布している口語体資料（小説や新聞、随筆や民話など）からレイスモの事例を採取し、その統語的分布の傾向を考察する。

4.1 接語重複

スペイン語では、一つの文の中に同じ指示対象の目的語が明示されているにも関わらず、弱勢人称代名詞が重複して用いられることがある。とりわけ、パラグアイとエクアドルにおいて顕著な現象である（Fernández-Ordóñez 1999: 1348）。つぎの例では与格 *le* が直接目的語（下線部）を照応する。

- (18) Por supuesto que *le* creo al General Díaz, ... [Beatriz Imelda, ABC (web): 08-9-3]
- (19) un tribunal de sentencia *le* liberó con la mayor caradurez del mundo a uno de los asesinos. [Nuevo: 09-8-20]
- (20) Rodrigo me dijo que *le* iba a traer al muchacho a la casa. [Última Hora: 09-8-28]

そして、指示の重複する直接目的語が共起する場合 (21a) は与格の人称代名詞をとるが、重複がない場合 (21b) は対格をとる。

- (21a) ... el futuro marido supuestamente *le* pegó a la jovencita ...
- (21b) Dice que su novio *la* pegó cuando iban por la alianza ... [Crónica: 09-8-27]

同じ文中に目的語が明示されるのに指示対象が重なる形で人称代名詞が生起するのは何故か。その理由としてはまず、間接目的格三人称代名詞は男女

同形であるうえに敬称として二人称を指す機能を含むことから、誰を指しているのか明らかにするのに目的語を補足することがある：*se lo doy {a ella / a usted}*。それに加え、与格 *le* はそれ自体で対象を指示することよりも、後に続く直接目的語の出現を「予告」する働きに重点が置かれ、意味の漂白された格標識辞として機能しているのではなかろうか。

ところで、人称代名詞が複数形の直接目的語を照応するのに、複数形 *les* の代わりに単数形 *le* が用いられることが（口語を中心に）しばしば起こる。つぎの例では、下線部の複数名詞を与格単数形 *le* によって照応している。

(22) A Beatriz y Carmen no *le* vi ayer. [青砥 2007: 73]

(23) ... para poder ver*le* a sus hermanitos antes de morir*se*. [Crónica: 09-8-27]

このような数の中和現象が起こる要因としては、音韻現象としての語末 */-s/* の脱落 (Choi 1998: 111)、間接目的格人称代名詞の三人称不変化形 *se* からの類推 (Kany 1970: 139)、あるいは複数形の省略による形態論的単純化 (Granda 1988: 240) などが挙げられる。同じ文中に同じ対象の目的語が明示されるのであれば、目的格人称代名詞は余分な情報となるのだが、それにもかかわらず重複して生起するのは、上記のように目的格人称代名詞には後続に目的語の出現を標示する働きが与えられているからと考えられる。つまり、目的格マーカーとしての役割が際立ち、複数標示の機能が劣化したのである（それに相関するように語末子音 *-s* の脱落や異形からの類推が起こったとも言える）。

また、三人称は基本的に話し手や聞き手とは異なる談話空間に属する（あるいは心理的な距離を置いて聞き手を敬称する）。そして、対格が他動詞文の必須要素として行為の作用を一次的に受けるのに対し、与格はその作用を対格から二次的に引き継ぐ付加的な要素である⁷。同じ対象を直示する直接

目的語が文中に含まれる接語重複のケースでは、動作の主体と客体が直面するような形ではっきりと指示する対格の人称代名詞を用いた場合、過剰な情報量が発生するが、対格の指示対象を介す形でぼんやりと指示する与格によって代用すれば、そのような指示の衝突が起こらず、適切な情報量を保つことができる。それゆえ、文法的性のみならず、元来備わっていた数の弁別にも関与する必要がなくなり、格標識辞として単純化したのであろう。そして、間接目的格人称代名詞がこのような性質を有するがゆえに、次節において考察するような、レイスモと結びつきやすい統語的環境が存在すると思われる。

4.2 不確定性

パラグアイのレイスモは如何なる文においても直接目的格人称代名詞と置換可能というわけではない。下例のように、文法的性を区別しない関係代名詞 *quien* や疑問詞 *quién* を照応するようなとき、人称代名詞は男性形と女性形を区別する対格よりも、男女同形の与格 *le* のほうが適合する。

(24) ... para saludarle a quien iba a ser mi comadre. [Popular: 09-9-3]

(25) En realidad uno ya ni sabe a quién creerle. [Nuevo: 09-8-20]

話し手にとって疑問詞の指示する対象が実在するか否か不明であるのは自明の理であるが、未確定的または仮定的な命題もまた、発話時においてはその対象の実在が確定するものではない。というのは、命題の要素が具体的に発話現場に存在するわけではなく、そこから離れた仮想空間に属するからである。そのような命題の一つは、前置詞 *para* などによって導かれる目的のフレーズである。レイスモは「*para* + 不定詞句」(26)には不定詞の接辞として、

⁷ 例えば *Juan le llevó un libro a Pedro*. という文では、動作主 *Juan* の為す動作によって空間移動する第一の対象は *un libro* であり、その移動物を引き受ける第二の対象が *Pedro* である。

「*para que* 節」(27)では接続法に活用する動詞の前に生起する。これらは談話の基準時ではまだ実現していないがそれ以降に実現するであろう未確定の事態を表現する。

(26) Hasta *para verle* a mamá tengo que esperar que él llegue y me lleve. [Popular: 09-8-28]

(27) ... *para que* Domingo *le* entierre cuanto antes a su esposa fallecida ... [Nuevo: 09-6-30]

接続法は目的のほか、願望(28)や要求・指示 (29-30)、非現実的な仮定(31)を表したり、不定語(32)や否定語(33)に導かれ、実在不明な事態、あるいは実在しない事態などを表したりする。下掲の例では、そのような接続法に活用する動詞の目的語としてレイスモが観察される。

(28) Si no quieren que *les* coma, o más bien, antes de que *les* coma, cuéntenme el chismecito. [Pedrozo 2006: 96]

(29) ¡A traer agua limpia y miel voy! - gritó Pangracio, y pidió que *le* acompañe Niní. [Pedrozo 2006: 44]

(30) El Comisario mandó que los cinco conscriptos *le* fuesen a apresar inmediatamente y *le* trajeran, maniatado con alambre de púa, a la Alcaldía Policial. [Villagra Marsal 1964: 30]

(31) ése sí que se desapareció como si *le* hubiese comido la tierra. [Villagra Marsal 1964: 77]

(32) ... porque ni por nada iba a encontrar una que *le* aguante. [Villagra Marsal 1964: 27]

(33) Ellos tenían encendido un fuego grande y Karayá les robó, sin que nadie *le* vea,

un carbón encendido ... [Krivoshein de Canese 1996: 66]

このように、不確定的または非現実的な事態を表現するような文は、レイスモの生起する統語的環境として好まれる。それに反し、確定的・現実的な内容の文には対格のほうが相性が良い。例えば対話文(34)において、一人目の発言では、仮定の事態を表現する接続法現在形 *se presente* の主語名詞句内に与格 *le* が現れるが、二人目の発言では、今実現される動作であることを意味する直説法現在形 *acuso* が目的語として対格 *la* をとる。

- (34) - Jarara es acusada de apagar a nuestra amiga Lamparita. Yo propongo que se presente quien *le* acusa.

- Yo *la* acuso, *la* acuso, *la* acuso... de robar el foco de mi amiga querida.

[Pedrozo 2006: 23]

続く例文(35)では、直説法完了過去形 *vio* の示す現実的な知覚動作の客体は対格 *lo* をもって指示されるが、接続法過去完了形 *hubiera visto* を含む非現実的な仮定文では与格 *le* が現れる。

- (35) Después de caminar un poco más *lo* vio de repente pero se hizo la sonsa y siguió como si no *le* hubiera visto. [Acosta Alcaraz 1994: 30]

つぎの例文（下線部）は、動詞は直説法現在形 *quiere* であるが、男の子の口からは信念（母親は猫よりも自分のほうを愛している）とは裏腹に起こる疑念が語られる。ここで直接目的語 *gato* を照応する人称代名詞として与格 *le* が現れる。

- (36) ¿Te gustan los gatos? - A mí tanto... pero el gato que hay acá es de mamá, ¡y hace lo que quiere! Hasta a veces creo que le quiere más que a mí. [Pedrozo 2006: 91]

さらに、未来の事態や話し手の推量などを表す未来時制の例を見たい。下掲の動詞は未来形 *hará* (37)と未来迂言形 *vamos a buscar* (38)である。

- (37) A los muchos amargos que andan por la vida, les aconsejo tener una mascota, *le* hará muy felices. [Leticia Fernandez, ABC (web): 08-9-6]
(38) Eso tendremos que consultar con el búho sabio, que no se equivoca nunca. *Vamos a buscarle.* [Pedrozo 2006: 118]

いずれの命題も発話時においてはまだ実現していない事態であり、客体は発話時と離れた未来空間に属する。つまり、話し手との距離が遠い存在である。

つぎは、動詞 *llevar* が対格と与格の人称代名詞をとる例を比べてみたい。完了過去形 *llevó* (39)の示す完結した出来事における具体的な客体には対格 *lo* が使われるが、一方、未来迂言形 *vamos a llevar* (40)や過去未来形 *debería llevar* (41)の示す未来や推定上の行為の対象には与格 *le* が当てられている。

- (39) ... pronto comenzó a seguir al grillo bailarín, quien *lo* llevó al otro lado del arroyo, donde el cazador se desatinó. [Pedrozo 2006: 23]
(40) Ya sé dónde está Tomás, *vamos a llevarle* al hospital del bosque. [Pedrozo 2006: 23]
(41) Alguien debería *llevarle* a Alcohólicos Anónimos. [Pedrozo 2006: 97]

前節において話題にしたように、目的語が複数形であっても、それを照応する人称代名詞は単数形をとることがある。下の例文(42)では、麻薬の消費が懸念される想定上の子供達を与格単数形 *le* でもって指している。

- (42) Los oyentes pueden llamar a contar sus experiencias con las drogas, también padres que sospechen que sus hijos estén consumiendo drogas, los profesionales *le* podrán ayudar. [Popular: 09-9-3]

つまり、行為の対象が仮想上の不特定の人であるならば、具象性や特定性を連想させる複数標示はむしろ都合が良くないのである。

本節では口語体資料に基づきレイスモの統語的環境について分析した。レイスモは、指示対象が不定である疑問詞や、文法的性の区別がない関係代名詞を筆頭に、話し手の仮想世界を描写する接続法、あるいは未来の出来事や話者の推量を表現する文などにおいて好まれる。なお、スペインのレイスモについて Fernández-Ordóñez (1999: 1324) は、情意動詞に関する節において未完結 (*imperfectivo*) アスペクトと与格の結びつきを指摘している：*A Jesús nunca le decepciona su amiga María*。本研究では情意動詞のみならず、他のタイプの動詞についても例示したが、ここで話題にした接続法や未来時制なども同様に未完了性を帯びる点において一致しており、地域性を越えたレイスモの特性を今後探求する上で興味深い。

5. グアラニー語の影響について

アメリカ先住民言語＝グアラニー語は現在、パラグアイを中心に、アルゼンチン北東部、ブラジル南西部などにおいて話されている。パラグアイでは9割以上の国民がスペイン語とグアラニー語のバイリンガルであり、中南米では唯一、憲法によって先住民語が公用語に指定されている。第一言語と

しては地域差や社会階層差があり、都市部の中・上流階層ではスペイン語、都市部下流階層や地方の農村部ではグアラニー語が優勢である。国勢調査 (DGEEC 2002) によると、家庭内の使用言語は、都市部では 8 割程の人がスペイン語、2 割程の人がグアラニー語であるが、地方の農村部ではその比率が逆転する。

地域差とともに使用場面の違いもある。スペイン語は公的な場面（役所や会社等）やマスメディアにおいて支配的であるが、グアラニー語は基本的に日常会話や民謡などに限られる。しかし、地域や社会階層に関わらず、同国人同士の日常会話では 2 つの言語を別々に運用するのではなく、話題に応じ、それぞれの言語の語彙や表現を混交させながら会話を展開する（世俗ではジョパラー *jopará* と呼ばれる）。

さて、グアラニー語の人称代名詞は次表に示すとおりである。間接目的格は主格人称代名詞に所格標識辞 *-pe*（異形 *-ve*, *-me*）を後置する形で標す。一人称と二人称は 2 つの格がおのおの異なる形式をとるが、三人称のみが同形である。なお、グアラニー語には文法的性が存在しない。

	単 数 形	複 数 形
一人称 〔主〕 〔直〕 〔間〕	<i>che</i> <i>che</i> <i>chéve</i>	<i>ñande (i); ore (e)</i> <i>ñande, ñane (i); ore (e)</i> <i>ñandéve (i); oréve (e)</i>
二人称 〔主〕 〔直〕 〔間〕	<i>nde</i> <i>nde, ne, ro</i> <i>ndéve</i>	<i>peẽ</i> <i>pende, pene, po</i> <i>peẽme</i>
三人称 〔主〕 〔直〕 〔間〕	<i>ha'e</i> <i>ichupe</i> <i>ichupe</i>	<i>ha'e kuéra</i> <i>ichupe (kuéra)</i> <i>ichupe (kuéra)</i>

〔主〕 主格 〔直〕 直接目的格 〔間〕 間接目的格

i = *inclusivo*（話し手を含む） *e* = *exclusivo*（話し手を除く）

目的格三人称代名詞は動詞の後ろに生起する。

(43) a-juhu ichu-pe

1 単 - 会う 彼 - を (私は彼と会う)

(44) a-mondo ichu-pe ko ajaka

1 単 - 送る 彼 - に この 籠 (私は彼にこの籠を送る)

このようにグアラニー語 *ichupe* は、対格・与格および男性・女性が同形であるという点においてレイスモと一致する。それゆえ、パラグアイのレイスモは先住民語の影響によるものではないかと推定されてきた (Choi 1998: 101)。表層言語の変化における基層言語の影響については、前者の詳細な統語的分析を抜きにして安易に語られるべきではなく、同国におけるレイスモの発生源としては上記のとおり歴史的観点から認めるべきではない。しかしながら、パラグアイのレイスモが口語法に属し、南米のなかでは局地的に普及している点において、グアラニー語の使用領域および地理分布と一致しており、やはりその因果関係の可能性は否定できない。

もし先住民語の影響があるのならば、グアラニー語の混在するスペイン語文ではレイスモが一層起こりやすいのではないかと想像することができる。そのような事例として、例文(45)の文頭 *he'i* はグアラニー語で「... と言う、... らしい」を意味し、ジョパラーにおいて頻用される。ここで不定詞 *subir* の末尾にレイスモが起こっている。

(45) *He'i que él solo paró para subirle a Navarro.* [Popular: 09-9-3]

続く例文(46)では、グアラニー語の所格標識辞 *-pe* がスペイン語の名詞 *calle* 「街路」の末尾に付いている。従属節 (*denunciar que...*) 内に 2 つの動詞句が

並列するが、前方の動詞 *interceptaron* のとる人称代名詞には対格 *lo* が、後方の動詞 *tiraron* の目的語には与格 *le* が生起する。

- (46) Miguel Ayala llegó ayer a la comisaría para denunciar que dos malandros a bordo de una motocicleta *lo* interceptaron *cállepe* a eso de las 8:30 de la mañana y de entrada nomás ya *le* tiraron por la muralla. [Popular: 09-9-3]

(下線部訳：街路において彼の行く手を阻んだ)

ここでは接語重複がなく、なおかつ目的格人称代名詞と共起する他動詞が双方とも同じ法と時制（直説法完了過去形）をとり、過去に完結した事実を叙述していることから判断すると、レイスモと相性の良い統語的環境とは言えないが、同じ文の中に2つの格形式の揺れが現れている。レイスモが自由変異でない以上、その選択には何らかの動機が背後にあるはずであり、それは前方のグアラニー語接辞がきっかけになっている可能性がある。

6. 結語

本研究では、パラグアイにおいて収集した口語体資料からレイスモ（レ代用法）の事例を採取し、その統語的環境を考察した。レイスモがパラグアイの口語スペイン語において一般化しているとはいえ、標準語法の対格も共存しており、必ずしも一律かつ無条件に現れるわけではない。レイスモと相性の良い統語的環境の存在が想定される。

間接目的格三人称代名詞には以下に列挙する性質がある。

- (1) 指示対象が発話現場とは異なる談話空間に属する。あるいは相手との距離を置くように、婉曲的に聞き手を敬称する。
- (2) 動詞の示す動作の効用を対格を通じて二次的に受ける付加的な文要素であり、動作主からの働きかけが対格よりも弱い。

- (3) 文法的性を持たず、生物的な性を弁別しないという点において、対格と比べて意味的構成要素を欠く。
- (4) 単数形によって複数名詞を照応するという単純化現象に見られるように、文法的性のみならず、元来備わっていた数の概念をも失いつつある。

すなわち間接目的格三人称代名詞は、統語法上のみならず意味論的にも自立性が低く、文脈依存度の高い指示形式である。このような特性があるため、レイスモは照応する直接目的語と重複的に共起しても情報量の過剰を調整し、仮定的な談話空間において実在の確定しない対象をぼんやりと指示するのに適する。つまり、接語重複、ならびに疑問詞、関係代名詞、接続法、未来時制、推量表現などを含む構文との相性が良い。したがって、対格と与格の揺れは、話し手の気まぐれなどによる自由変異ではなく、機能の違いと結びつく。

本論ではさらに、レイスモに対するグアラニー語の影響について話題にした。レイスモが周辺地域からの標準語法の波を被ることなく局地的にパラグアイの口語法として一般化したのは、先住民言語との接触が背景にあると考える。その理由として次の3点を挙げた。

- ① グアラニー語とスペイン語が日常会話において混交する。
- ② グアラニー語もレイスモも使用場面が基本的に日常会話である。
- ③ グアラニー語に文法的性がなく、スペイン語の間接目的格三人称代名詞にも文法的性の区別がない。

拙稿では、パラグアイのレイスモと相性の良い統語的環境について考察したが、現段階ではまだ部分的な様相を示したに過ぎない。動詞タイプ毎の分析も詳細に行う必要がある。グアラニー語の影響に関する議論を含め、統語的分布とその動機付けについて今後さらに研究を進めていきたい。

【参考文献】

- Alvar, Manuel. 2001. *El español en Paraguay: estudios, encuestas, textos*. Madrid: Universidad de Alcalá; La Goleta; AECL.
- 青砥清一. 2007. 『パラグアイにおけるスペイン語のバリエーション — 認知、言語、社会の相互作用 —』. 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻課程博士論文.
- Azara, Félix de. 1847. *Descripción e historia del Paraguay y del Río de la Plata*. Madrid: Sanchiz.
- Choi, Jinny Kyungjin. 1998. *Languages in contact: A morphosyntactic analysis of Paraguayan Spanish from a historical and sociolinguistics perspective*. Ann Arbor, Michigan: UMI Dissertation Services.
- Demello, George. 2002. “Leísmo in contemporary Spanish American educated speech”. *Linguistics: an interdisciplinary journal of the language sciences*. March-April. pp.261-284.
- Dirección General de Estadística, Encuestas y Censos (DGEEC). 2002. *Censo Nacional de Población y Viviendas 2002*. (ver.web) <http://www.dgeec.gov.py/>
- Fernández-Ordóñez, Inés. 1999. “Leísmo, laísmo y loísmo”. Ignacio Bosque y Violeta Demonte. *Gramática descriptiva de la lengua española*. Madrid: Espasa Calpe. pp.1317-1397.
- Granda, German de. 1988. *Sociedad, historia y lengua en el Paraguay*. Bogotá: Instituto Caro y Cuervo.
- Guzmán, Ruy Díaz de. 1612. *Historia argentina del descubrimiento, población y conquista de las provincias del Río de la Plata*. Madrid: Biblioteca virtual Miguel de Cervantes.
- Henríquez Ureña, Pedro. 1921. “Observaciones sobre el español de América”.

- Revista de Filología Española VIII*. Madrid: Centro de Estudios Históricos. pp.357-390.
- Kany, Charles Emil. 1945. *American-Spanish Syntax*. Chicago: The University of Chicago. (Traducción al castellano: Martín Blanco Álvarez. *Sintaxis hispanoamericana*. 1970. Madrid: Gredos.)
- Krivoshein de Canese, Natalia. 1987. *Gramática de la lengua guaraní*. Asunción: Colección Ñemity.
- Melià, Bartomeu, Luis Farré, Alfonso Pérez. 1997. *El guaraní a su alcance*. Asunción: Centro de Estudios Paraguayos “Antonio Guasch”.
- 三好準之助. 2006. 『概説 アメリカ・スペイン語』. 大学書林.
- Real Academia Española. 2009. *Diccionario de la lengua española*. Vigésima segunda edición. Madrid. (ver. web) <http://buscon.rae.es/diccionario/drae.htm>
- 高垣敏博. 2008. 『地理的変異に基づくスペイン語の統語研究』. 平成 17・18・19 年度科学技術研究費補助金（基盤研究（c））研究成果報告書.
- Varilex. 2002. *Varilex 10*. Tokio: Equipo de Investigación Varilex. (ver. web) <http://gamp.c.u-tokyo.ac.jp/~ueda/varilex/index.php>

【言語資料】

（新聞・雑誌）

- ABC color*. Asunción; (ver. web) <http://www.abc.com.py/>
- Concepción Noticias, Revista Interactiva de “La Perla del Norte” del Paraguay*. (ver. web) <http://concepcionnoticias.blogspot.com/>
- Crónica*. Asunción; (ver. web) <http://www.cronica.com.py/>
- Nuevo*. Pedro Juan Caballero.
- Popular*. Asunción; (ver. web) <http://www.diariopopular.com.py/>
- Última Hora*. Asunción; (ver. web) <http://www.ultimahora.com.py/>

(文 学)

Acosta Alcaraz, Feliciano, Tadeo Zarratea. 1994. *Ka'i rembiasakue, Las aventuras de Ca'i*. Traducción al castellano: Natalia Krivoshein de Canase. Asunción: RP ediciones; Expolibro.

Krivoshein de Canese, Natalia, Carlos Martínez Gamba, Feliciano Acosta Alcaraz. 1996. *Tetãgua Remimombe'u, Cuentos populares paraguayos*. Traducción al castellano: Natalia Krivoshein de Canase. Asunción: RP ediciones; Expolibro.

Pedrozo, Amanda. 2006. *Diario del Bosque del Este*. Biblioteca infanto-juvenil dirigida por Augusto Roa Bastos. Asunción: Editorial Servilibro.

Villagra Marsal, Carlos. 1964. *Mancuello y la Perdiz*. Asunción: El Lector.